

【今日の説教から】

迫害を逃れて地下墓所に隠れながら礼拝を守った原始教会。後にそこで讃美歌のように歌われた詩、それが今日の箇所の 6－1 1 節です。

1 節では、4 重に畳みかけるようにもしあなたに…があるならとパウロは語りかけます。キリストによる勧め(励まし)、愛の励まし(慰め)、御靈の交わり、熱愛とあわれみとがあなた方にはあるのだからと、パウロはピリピの信徒たちのうちにどんなにか愛と慰めがあるのかを示します。

2 節にも、言葉を重ね合わせるように丁寧に語られます。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。」

お一人のキリストを信じ、慰めと愛とを頂く者として、同じ思い、同じ愛の心、心を合わせ、一つ思いになって…と、これ以上にないほどに心を合わせ一つとなるようにと語るパウロ。「何事も党派心や虚栄からするのではなく」…それほどまでに教会を分裂させる嵐が吹き荒れていたということでしょうか。

「へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者とし… おのれの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」との生き方に導くものがここにあります。

「キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」 いつもいつもイエス様という中心が無ければ私たちはいとも簡単に扇の要を失ったようにバラバラになってしまふのですね。

皆様おはようございます。暑さがひと段落と思えば石川の方では豪雨被害をもたらすような大雨の時となりました。年の初めから震災があり、台風やゲリラ豪雨等気候不順な年。皆さんのが不安になってお米を備蓄されお店にお米が見当たらないということが続いていますね。戦火もやまず、私たちはただただ祈り続けるばかりです。

そんな時ですから、私たちは先々のことを考えて不安になったりいたしますが、私たちには希望の源泉があることを思い起こしたいと願います。

2:1 そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御靈の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、

2:2 どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。

1 節でパウロは、4 重の（5 重の）恵みを語ります。

それはキリストによる勧め(励まし・慰め)、愛の励まし(慰め・安心感)、御靈の交わり、熱愛とあわれみです。

私たちは、私たちを取り巻く状況がどんなに切迫したとしても、獄の中に入れられようとも、獄の中を行くような希望の見えない状況を生きるとしても、私たちもまた5重の祝福を得ていることを思い起こしたいと願います。それは、キリストによる勧め(励まし・慰め)、愛の励まし(慰め・安心感)、御靈の交わり、イエス様と神様の熱愛とあわれみです。

そしてパウロは、私たちがもしそのような溢れる愛で支えられいるのならば、同じ思いをもって一つ心でいてくださいねと語るのです。

2:2 どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。

ここでも包み重ねるように丁寧に4重にわたってピリピの教会の人たちのために彼は祈り願います。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって」

どうでしょうか。彼は獄の中から、祈りを込めて、本当に伝えたいことを凝縮して語っています。本当に大切なことを伝えようとして、愛するピリピの教会の人たちのために語り掛けています。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって」

このことは、私たちの辛い現実を表しているのではないでしょうか。4回も重ねて語り、語っても語っても語り足りない、私たちの弱さが語られているのではないでしょうか。

私たちが同じ思いでいて、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになることは、何と難しいことか、パウロにはそれが分かっていました。キリストの血潮による赦しを頂いた教会の中でさえ、それはそれは難しいことだったのです。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。」

それがパウロの喜びでした。それがキリストにふさわしい愛の交わりでした。

しかし人の弱さには次のようなものがありました。

2:3 何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐ

れた者としなさい。

2:4 おのれの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。

同じ思いになり、愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになかなかなれない…。

何事も党派心からしてしまうのです。それは人のわがままな心、自分を思うあまりの党派心、ライバル心です。自分が一番という思いです。傍若無人の考え方です。我田引水の考え方です。そういう思いが人の中にはあります。私たちの心の中にあります。

虚栄。うぬぼれがあります。自慢があります。人を妬み、敵愾心を持ち、勢力争いをして、勝った負けたとライバル心を燃やし、そしてうぬぼれ自慢するのです。自分のことばかりで人のことを考えないです。そういう極めて自己中心な存在なのです。その心がパウロを苦しめるのです。ですから彼は、「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい」と語るのです。「何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者と」するようにと語るのです。

ここには教会とは何か、信仰とは何か、キリスト教徒は何かという極めて根本となる中核的な教えがあります。

2:5 キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。

キリストが要なのです。私たちは互いに自分のことばかり考える存在であり、ですから私たちは一人一人キリストを見る必要があります。

このキリスト・イエスに見られる性質を私たちは自らの肝心かなめの生き方、真理、生活規範、価値判断の基準として取り入れるのです。それがキリストを信じるということです。

2:6 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、

2:7 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、

2:8 おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。

これは原始教会の信徒たちの間で語り伝えられ、賛美として歌われた節となつたと言われています。

くりかえしきりかえし歌われ、賛美せられるキリストイエス様の美しいご品性。私たちもこれをじっと見つめて玩味し、この言葉を滋養溢れる私たちの生きる糧として賜りたいと願います。

キリストはイエス様として人となりて降られた時、神の性質と形を持ったお方、すなわち神ご自身であられました。しかしイエス様は神と等しいと考えることを握りしめ、それにしがみつくことはなさいませんでした。自分が自分が、とは考えなかったのです。さらにそれに反して力をはぎ取って、権力をかなぐり捨てて何の力も影響力もない者のようになられ、しかもべや奴隸の性質や形をとられたと聖書にはあります。この「性質」と「形」という言葉は、先の神の性質と形という言葉と同じ言葉が使われ、はっきりとした対比がなされています。イエス様は神としての「形と性質」を持っておられたのに進んでしもべや奴隸としての「形と性質」をとられたのです。そこには何のプライドも恩着せがましさも打算もなく、引換条件もなく、ただただイエス様はてっぺんにおられた「形と性質」を、ただただ最下層の、しもべの、奴隸の、売られて買われて、主人に仕えるしもべとして、主の主、王の王でおられるお方が仕える者となられたのです。そしてイエス様は弟子に仕え、罪ある人間に仕え、十字架につき、私たちの罪のために奴隸として仕える者となられ、命まで注ぎだしてくださったのです。

2:7 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、

2:8 おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。

このイエス様のお姿を、繰り返し繰り返し味わう。そして胸に手を当てて、自分はどうに生きていくかを考える。これがキリスト教です。キリスト教の鍵は、キリスト・イエスです。キリスト教の鍵は、神のご性質を持たれたお方がしもべの形となられ、贖いの十字架についてくださったということです。そして私たちを罪と死と呪いと悲惨から救い出してくださったのです。ここにキリスト教の真理があります。そこまでも従順に進まれたイエス様。従順にということは、父なる神様の御旨の通りに従い通したということです。ということは、イエス様の進まれた道は全て父なる神様の思いが満ち溢れているということです。そこまでして、犠牲を払って、私たちのために仕え、尽くし、犠牲を払われてということは父なる神様の深いご意志だったということです。

2:9 それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。

2:10 それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるもののがひざをかがめ、

2:11 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

そこまでも無私の精神で、神様に仕え、自らの思いを超えて神様のご意志に従順に従い、神様と隣人を愛する熾烈な生活を送るとき、神様はその人を高く引き上げてくださいます。神様がイエス様を死と墓とから復活させたように、神様は引き上げてくださいます。

神様はこうして、すべての名にまさる名を彼に賜わり、

「イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」とあります。

イエス様は主です。主であるお方が私たちの主となるとき、私たちの主体となり、主人となり、私たちの主体となるとき、私たちがこれこそが私たちの人生の主要な大切な方だと受け入れて従うとき、この方は私たちの要となってくださいます。この方を主として従うとき、私たちはかつて幼稚に自分をちやほやしていた時とは比べ物にならないくらいに幸せと喜び、慰めと励ましを得ることが出来ます。教会でも一つ心になって主なるキリストのもとでらにはない平安を得ることが出来ます。そして大きな業を成すことが出来ます。

私たちも、このイエス様にあるのと同じ思いをもって、さらにさらに恵みの深さを体験しようではありませんか。ただ見て、聞いて、知識として知って、憧れるだけではなくて、イエス様にあって生きる生活にこそ深い深い恵みがあります。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。私たちにとって、どれほどイエス様という方が大切な方なのか、私たちの中心をなす方なのかを教えられます。いつもいつもこのお方に戻ることなしには、励ましと慰めと愛と喜びを欠き、何事も利己心や虚栄心から行い、それが心を合わせ、思いを一つにすることを妨げます。あなたは扇の要のよう私たちを一つにし、互いに仕え合い励まし合う教会を形作り、私た

ちの人生の要でいてくださり、すべてのものを相勵かせて益としてくださいます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン